

2025年1月5日

主の公現の主日

菊地 功 枢機卿 メッセージ

皆様、新年明けましておめでとうございます。

占星術の学者たちの言葉を耳にしたときの、ヘロデ王の不安を、マタイ福音は伝えています。占星術の学者は、新たなユダヤ人の王が誕生したと告げています。それを告げられている相手、すなわちヘロデ王は現役のユダヤの王様です。心は乱れ、不安に駆られたと福音は記しています。自分が手にした地位と名誉を脅かすものが現れたと告げられているのですから、ヘロデ王の心は不安に満ちあふれたことでしょう。その不安は、単に地位が脅かされることへの不安にとどまらず、神の真理による支配の前では、自らの不遜さが明らかになってしまうことへの不安でもあります。人間の欲望に基づいた傲慢な支配におごり高ぶっている姿が暴かれることで、ヘロデ王は自らが罪の状態にあることが明らかになってしまいます。そこに不安が生じます。

わたしたち自身はどうでしょうか。人間の欲望に支配されて傲慢さに満ちあふれていないでしょうか。飼い葉桶に寝かされた神のことばの受肉のその弱々しい姿が、謙遜さこそ真の力であることをわたしたちに教えています。

困難な旅路を経てイエスの元にたどり着いた占星術の学者たちは、暗闇に輝く小さな光にこそ、人類の希望があることを確信します。学者たちはその確信に基づいて、すべてを贈り物として神にささげ、神の支配に従うことを表明し、その後も神の導きに従い、人間の傲慢さの元に戻ることなく神の意志に基づいて行動していきます。

教会はその小さな謙遜さのうちにある、神の希望の光を受け継ぎました。人間の欲望に支配された組織としてではなく、神の真理の光を小さくとも輝かせる存在でありたいと思います。

神が与えられた賜物であるいのちは、誕生した幼子が守られ育まれたように、わたした

ちに同じように守り育む務めが与えられています。いのちはその始めから終わりまで、例外なく守られなければなりません。また守るだけでなく、神の似姿としての人間の尊厳は、常に尊重されなくてはなりません。

毎年のはじめに教皇様は世界平和の日のメッセージを発表されています。今年は「わたしたちの罪をお許してください。平和をお与えください」をテーマとされています。

メッセージ冒頭で教皇様は、「私は特に、過去のあやまちによって重荷を負わされ、他者の裁きによって攻撃され、自分の人生にかすかな希望さえ見いだせないと感じている人たちのことを考えている」と記され、始まったばかりの「希望」をテーマとした聖年において、周辺部に追いやられ排除されることの多い多くの人へ心を向けています。

その上で教皇様は、聖ヨハネ・パウロ二世教皇の「構造的な罪」を引用しながら、世界で起きている人間の尊厳をおとしめている様々な出来事に、人類全体が何らかの責任を感じるべきだと指摘します。

今年のメッセージで教皇様は、国家間の負債の軽減、いのちの尊厳を守ること、武力のための資金の一部を飢餓などの軽減のために使うことなど、具体的な提案をされています。

わたしたちは、何に基づいて生きているのでしょうか。人間の傲慢な欲望か、神の真理に基づく希望か。あらためて見つめ直してみましょう。